社会の姿とともに変わるがん

がん社会を診る

中川 恵一

現在、日本で一番多いがんは、女性では乳がん、男性では前立腺がんです。なお、女性に前立腺がんはできません。男性の乳がんは女性の1％程度ですが、存在します。

この2つのがんは急速に増えており、日本人女性の9人に1人が乳がんを、男性でも、同じく9人に1人が、前立腺がんを経験します。米国では、ともに8人に1人が罹患していますから、日本でも、増えるものと思われます。

この二つのがんは、「性ホルモン」によって増殖するのが共通点です。乳がん細胞は、「エストロゲン」という女性ホルモンの刺激によって増殖します。同様に、男性ホルモンの「テストステロン」が、前立腺がんを増やします。

したがって、性ホルモンの分泌を抑えることで、この2つのがんを抑えられます。最近まで、卵巣への放射線照射や精巣の摘出が行われてきました。今は注射によって行えるようになっています。

イラスト　中村　久美

脳下垂体から分泌される「性腺刺激ホルモン」によって、卵巣や精巣から性ホルモンが放出されます。注射によって、脳下垂体を過剰に刺激することで、性腺刺激ホルモンの分泌を抑え、卵巣や精巣を摘出したのと同じような効果が得られるのです。

さて、乳がんや前立腺がんが増えている背景に「食の欧米化」があると思います。過去50年で日本人の肉の摂取量は10倍にも増えました。

1960年には1人当たり年間の食肉（牛肉・豚肉・鶏肉）消費量は3・5キログラムでしたが、2013年はその10倍の30キログラムとなりました。

動物性脂肪を多くとると、血液の中のコレステロール値が高くなります。コレステロールを材料として、卵巣や精巣で、エストロゲンやテストステロンが合成されます。肉を食べないと性ホルモンが作られないことになります。

世界の仏教界でもめずらしいことですが、日本の僧侶は、肉食・妻帯が当たり前です。しかし、親鸞以前の僧侶の食事は「精進料理」でした。これは、殺生をしないという理由のほかに、肉食が修行の妨げになったからでしょう。精進料理とは逆の肉食中心の食事によって、性ホルモンの分泌が高まったことが、乳がんや前立腺がんが増えた背景にあると私は考えています。

乳がんの急増には、少子化も関係しています。妊娠から授乳に至る約2年間は生理が止まり、エストロゲンによる刺激も減るため、乳がんのリスクが下がります。

現代の日本人女性は生涯に450回程度、生理を経験するようですが、100年前は5分の1程度でした。「子だくさん」だったからです。

がんは、社会とともに姿を変える病気だと痛感します。

（東京大学特任教授）